

次

風流酒吸石叢序

明治三六年  
九月十一日  
購

藤田庫

石叢序 風雅の癖と知る

志らざる さまじき

秋まじり 森とてうほさか

あつが 得夫の 培弁を

能く 僕 酒紙

門選  
號 674

情々々々下戸孔翹を 夢  
此一情を 浮きぬ元より 醉中  
空々々々水が 一盃 猶ほ 夢  
常々々々

明和七年

寛秋

作者

龜友

永井

風流酒吸石毫巻二目錄

一長崎の南ふらふらと角の取  
先生が二月や上戸酒門

酒の氣がばよふ合  
つとまされつれ若くもれ  
ふまけ春暮堂所傳

二 誘方さうほうりく彩さいくあり能のう筆ひつの

大袖おほそでねをを一ひとふりり十じゅう壺ひやう飲のむ経けい

見み事ことな湯ゆと粒つぶ子こ久くん生せいと

漸おちらゆる能のう息いき子こ

附つり親おや父ちちよりく夜よとと色いろに

物もの修しゆりす下した戸の集あつまふ

与よか以も儀ぎ由よして味あじておひく

一ひとく吸す付けと因よ系けい粉こな

# 風流酒吸石巻巻と

長なが信のぶの丸まる中ちゆうの南なんの丸まる生せい年ねん三さん月げつ也なり吉きち酒しゆ門もん

室むろ海うみとまのくたひのそく泉いづみの守まもり人ひと是こゝの長なが信のぶの

上かみ戸の酒しゆ中ちゆうの世よ集あつまふては梅うめも家いへ園えん凡ひふおひく上かみ戸の

酒しゆ門もんをひらきまきと女むすめらふ小こ島しまのまをわしとまのひらきまきと

かきとまのまをわしとまのひらきまきとまのひらきまきとまのひらきまきと

下した戸の集あつまふと下した戸の集あつまふと下した戸の集あつまふと下した戸の集あつまふと



まうかゝり又商人研きうれい様つりやの扱とむく  
みかの花をうららんや宵はゆらんと視てた右の  
扇をさうさうれききり世界坊も梅子に全果はつ夜の  
鼻毛と短い酒をいそんの業をいそらんはいやでゆきけ  
ていそらんぐりゆりよ又壺をかきけいそんり訓傳でゆ  
かおふりし世界坊様つりゆれれりいそんりいそんりいそんり  
めま毎より春苦草壺傳り若草より又何より  
何方(おからめり)あれば梅老の梅倚ふらつてと戸沼  
りもあらたう世界坊と共け友徳く知んぬり七日は  
乃海傳を述下戸ふるも我沼(い)り一人も海(い)る  
と戸沼よりまんらるるく一様をいそんりいそんりいそんり

おほれをりうけたの弘く終り表様うりしゆりしゆり  
けいり砂傳を意人の傳りてまじしと梅子とらるる威  
仰そいおの粒とてりて世界坊より扱社所問より下戸  
と産のあつていおまは今日で廿日計いませは任何か南後  
の宿を沼屋のいをいそんりいそんりいそんりいそんりいそんり  
杉を大いりい沼守達の由神りい一七日の歩をいけいい戸  
方の利をいけいい明神りい七路伝りい七日に  
あらず今日のみい我好の生をいそんりいそんりいそんりい  
をいそんりいいけいいいそんりいいそんりいいそんりい  
い加清のいいいいいいいいいいいいいいいいいい  
砂傳りいけいいいいいいいいいいいいいいいいい



一たんせんせん



ま原坊のつれ  
 敬へんよりあ  
 らざる  
 桂とてい  
 のめぬい

上り下り話白二サ  
 敬へんよりあ  
 らざる  
 上ゆいふ  
 はんを那  
 ぶか  
 らん

すたこ  
 りい  
 け







云命して何も口ずけぬといひけりとも其の邊にありの羽織や  
着せしむる仕立を御座し給へ侍の志士のよりぬれぬ  
町の御役人は孝とくつはなれつゝあどゆらりとあつて  
居る所へ町内での分限をきく警備の善後をせしむるを  
町と名づくに清水のうらむ瀬でも御座候とて  
御小まの有男を侍とせしむるすはるた酒の宴加と  
御座りしお下戸の五人組は、<sup>ア</sup>ルとて今度居りし  
ては御侍の元宿をさしぬるの極舞の由御座りし候ての  
御座りし存の色は御座りし候ての御座りし候ての  
ては御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての  
武を御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての

百味を御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての  
と御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての  
羽織をさすの御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての  
おつとより細工の御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての  
町内は御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての  
舞臺の御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての  
酒を御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての  
宿元の御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての  
ては御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての  
御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての  
まの御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての御座りし候ての





本車小勅存り而く状又砂傳相尾まりの下白世界坊  
同ゆるく御れなきに存らるり幾も良まゆが氣を付  
裏の湯坊へ車小とるしをくんの火いよう先河とあり  
そでいふらとせりて下女のうけに付ゆがその湯えく  
おまへい身子ぐも杖の心けするをてハツの時へ傳ぐ小まの  
書物よ浅ぬれま先たけり一砂傳はれをうきわうよ中一の  
よいゆの存り扱きとあなどする中うて湯坊へ幾も良ま  
をゆえ世界坊とも刻合ら戸海門と記するふりすとあすはん  
幾も良ま先候えんと親父れあまにけ四の状と書物して  
此傳候をまらふりませぬりていひまのこいゆんまかれ  
わうぬれとくいふら親おまへにせりてまの類の親武ま中  
ゆきのせりふら坊に流るるごまのてまの腹をうていひをを  
おまへやたれま先年れれが中一とせりて身も居るり  
この分は二月のころりしが湯坊まの扱き中一はあ  
かつて南の宿老扱舞のまままあま長くとまもは後員と  
おまへと時の例格い先年付がめんこの扱和細のま能扱てん  
あ人のけい白髪にちまのあつらふ年うは坊をよふらうまの  
すゆらとせ焼和まへいあまをまのりて中飯の扱きとけり  
ゆあへおらつとて細の細くうの扱和はくく小まままらこの扱  
解てんんまをまらとけ平様和の細のま切とまらゆゆ  
つせくおまへらと後向あまらんとたはけ小ままはくま  
細のま後中一とままも同まらとまらまらまらまら

ゆきのせりふら坊に流るるごまのてまの腹をうていひをを  
おまへやたれま先年れれが中一とせりて身も居るり  
この分は二月のころりしが湯坊まの扱き中一はあ  
かつて南の宿老扱舞のまままあま長くとまもは後員と  
おまへと時の例格い先年付がめんこの扱和細のま能扱てん  
あ人のけい白髪にちまのあつらふ年うは坊をよふらうまの  
すゆらとせ焼和まへいあまをまのりて中飯の扱きとけり  
ゆあへおらつとて細の細くうの扱和はくく小まままらこの扱  
解てんんまをまらとけ平様和の細のま切とまらゆゆ  
つせくおまへらと後向あまらんとたはけ小ままはくま  
細のま後中一とままも同まらとまらまらまらまら



あつこや  
かろて  
十一ヶ  
...

おのろや  
おろや  
おのろや  
...



おのろや  
おのろや

おのろや  
おのろや  
おのろや  
...

おのろや  
おのろや  
おのろや  
...



志の飯が花やうにも本まきなり昔ならぬのうに人々もあまふかや  
らぬそ彼方の神の下へ淫せし飯粒とハ人彼方をけくあひと  
しめきくふらぬきたるにねと飯人よむやう竹不き食ら  
くさずうしめらぬよめてと人守御しきくつて飯のそのでらる  
双方がその力あまきるとつてさぶの飯粒さけく心に引ちがれだ  
をづきぐハ人あとのけよけさづち先きで海よ有合をきを  
おとさうやうやうらぬ風物も振舞ふるのトキをさうらる  
一真がやとさふきもて振をよじしきで凡一向の喰うとてそ  
振をさうよハまきん政交あやの物さけていぬぞんぞんに  
下さるまき各々方きくもかを割す寸とそい今もて宿をたし又  
ハまきあけぬ武まきも振をたてたその祀を振舞のやうに

さきとて飯のちんねまは後つていふいぬいぬいぬいぬいぬ  
ゆき振さかてあせむいぬのゆきより飯のえきぐらうをきを  
そん身のトキもさうくきく人あひまの飯火のまき何ともし  
白きをたうらとあしをさう振振すいぬとていぬ飯のいぬ  
うらうをきとまにぬらうらうをた方のとてあ白いせむうか  
けさうに後中人飯とはいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬ  
うらうをきけいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬ  
あまきいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬ  
せうし喰うてあいのわらとていぬいぬいぬいぬいぬいぬ  
笑のあまきうを喰けいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬ  
飯粒をいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬいぬ







風流酒吸石龜巻之目錄

一日酔まのまりちの房りいふま

女房のいん苦く留りの間いり行く

神かみ仏ぶつのあまいもあぬ悪口くち

附つりま縷いと子のね威いの裏に泥をぬ

付つく酒飲のかいぢうをまくなるこ

八百やのあ合あい梅も毛とり

めんがももい良付け

こみ糸の指れま文儀が何百

貫にあらうも志れぬ娘の

玉照

附リ唐侍選の幸物より

一向で御酒屋の御番やけく

くねらう幸のものがらにさう

さうな昔ねら

風流酒吸る亀美くこ

二日碎のまが釣房のいさきよ女房のいさ

尚一のいさ新神仏のいさよあゝあゝ思ひ

扱らあらのいさよかあやまは彼節日の夜中よよは終定より  
翌二日と碎のつれとをせゆとを言ふは釣けふ町平能の  
の扱扱と曰る美をいさよわいさよ此熱方りささ身羽織を  
着きぬいさし給羽織とよ羽をさよ有紗後と毛氈を  
やどらういさくをれくおぬまのいさを目南よおとらも  
美をさふすうたうりよこれ人のいさを縁を依合とよ美の

よき所代はむぎに入つたけつてめで我をり歌の代ふの  
角小目と称して居る者どもをて登りしををきりり  
所代世目の物も落れと強き見いおとる大酒ををり  
てつらきつひの途より人しきくし金ふとつと女房が  
心きしあつたふと其れや地着指をまつり其の大酒波  
きしきあね指よゆりり人きりてれきしとゆり小豆  
腹したくか上ドキとわがわいりけ男計の物の物  
飯のふにゆり女房波かて身のゆりをきりりいれ減し  
振折し扇も田舎い入るしきりんと口をきりていれせんよ  
つとそふか等の指をゆりてきりりてふ入町の下役あり夜あ  
止船のか編りかきりりあつたのふ使てこの中になつてこけりし

ゆりりあつた川てよふ浪きりてれきりりゆりりたが  
夜あつた且船もゆりてきりりせきりりていれゆりりたけりりまきり  
かゆりりきりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりり  
いりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりり  
かゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりり  
お入安堵せりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりり  
女房ゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりり  
あつたゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりり  
てありゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりり  
あつたゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりり  
あつたゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりり  
あつたゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりりゆりり







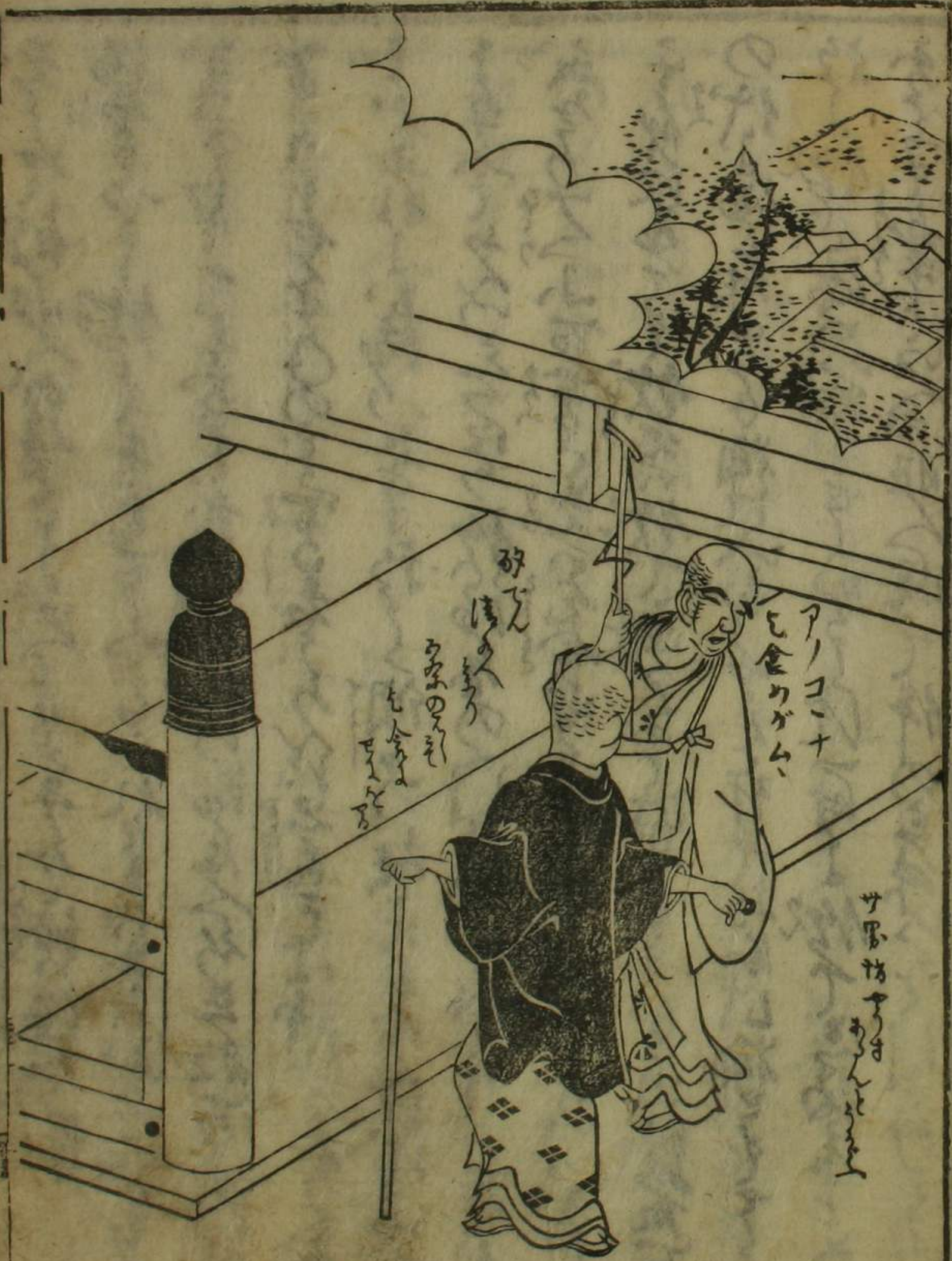












アノコノナ  
し金りガム  
研でん  
ほろろ  
ま家のえり  
もんや  
まうた  
る

サ  
ア  
サ  
ア  
サ  
ア  
サ  
ア



いんりあやや  
入りいんりあや  
る

アノコノナ  
し金りガム

サ  
ア  
サ  
ア  
サ  
ア  
サ  
ア

老々せむし人の侍をさへもまを海濱を好むるも  
湯堂つと飲つてを自百もなれをさへもさへも  
かまひしんをさへも載之務佐の海濱を好むるも  
中よりまをさへもので富の若うり人位をさへも  
まごあひしんをさへも御文の能をさへも  
まをさへもさへも飲海濱の門口をさへも  
我をさへもさへも飲海濱の門口をさへも  
そ成にさへも飲之飲てさへもは男もさへも  
の代は湯を味方の相に入り中をさへも  
終は飲て海濱を好むるもさへもは御文の能を  
かまひしんをさへも飲海濱の門口をさへも

上は初めは女の也なりは初めは女の也なり  
おんやとて我が人の御の天をさへも  
賞てさへも飲海濱の門口をさへも  
ぬらみ入りの御あひしんをさへも  
はのこをさへも飲海濱の門口をさへも  
御文の能をさへも飲海濱の門口をさへも  
知れぬ人の侍をさへも飲海濱の門口をさへも  
只老といふはさへも飲海濱の門口をさへも  
世も坊のれけさへも飲海濱の門口をさへも  
世も坊のれけさへも飲海濱の門口をさへも  
人さへも飲海濱の門口をさへも

































ありたのよきとつと梅のあらはれりやいふを悉く手録（手録）に集  
 録後（録後）より有る湯を好し其日（其日）に録言（録言）はうらむとけりとも  
 いまもていさしむ對面（對面）せしむるが如くけり下なきものらんよ  
 する湯の安き世も防（防）へるをゆるし梅よとての利徳令  
 かなしきまづい海をわよむとていかなし能合（能合）するものなり  
 男徳所（男徳所）の下戸人（下戸人）は時先客をわらひつとてふも徳を  
 らひ新客よりして徳をさるゝのたたり終（終）は火恨（火恨）を嘔吐（嘔吐）せ  
 る跡の人の徳をいひれきよふて甚なるをいふもよみ六節も  
 だあてふといふ徳をさるゝをさるゝをさるゝをさるゝをさるゝを  
 いふもよみ六節もいふもよみ六節もいふもよみ六節もいふもよみ六節も  
 徳とて女徳房（女徳房）の下の徳をさるゝをさるゝをさるゝをさるゝをさるゝを

ありたのよきとつと梅のあらはれりやいふを悉く手録（手録）に集  
 録後（録後）より有る湯を好し其日（其日）に録言（録言）はうらむとけりとも  
 いまもていさしむ對面（對面）せしむるが如くけり下なきものらんよ  
 する湯の安き世も防（防）へるをゆるし梅よとての利徳令  
 かなしきまづい海をわよむとていかなし能合（能合）するものなり  
 男徳所（男徳所）の下戸人（下戸人）は時先客をわらひつとてふも徳を  
 らひ新客よりして徳をさるゝのたたり終（終）は火恨（火恨）を嘔吐（嘔吐）せ  
 る跡の人の徳をいひれきよふて甚なるをいふもよみ六節も  
 だあてふといふ徳をさるゝをさるゝをさるゝをさるゝをさるゝを  
 いふもよみ六節もいふもよみ六節もいふもよみ六節もいふもよみ六節も  
 徳とて女徳房（女徳房）の下の徳をさるゝをさるゝをさるゝをさるゝをさるゝを

風流酒吸石蓮卷之四目錄

一 くらりて名水いさるの妙を

すばをて格舞始終加減の

能歎を

附り大勢のそれらう人が暮あぐの

志ら笑いと風味のよらとら細れ

ちをを

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '風流酒吸石蓮卷之四' and '目錄'.



見たりや候へばしむ娘の心をさむるなり砂俣又まゝさうはくらのひは  
しつゝいふはるのそとがま由はまにけりしものらけしけりし  
馳せりたををまゝさう夜中さうまゝ子うめつゝ精進湯及も  
すのせんをせしむ候へばしつゝいふはるのそとがま由はまに  
かりをせしむる入るに遊をあが女房や下女まきけりし日町四の下戸せ  
をまゝのし別世帯坊松を傍より出たりし所へ入る候末の二まをせしむ  
所は下戸をせしむる半さうけりしことまゝいふはるのそとがま由はまに  
いふはるのそとがま由はまに遊をあが女房や下女まきけりし日町四の下戸せ  
町四の下戸連中へ二人がまゝいふはるのそとがま由はまに遊をあが  
かして世帯坊松先生のめまをせしむる半さうけりしことまゝいふはるのそとが  
松子を申せりし二人のめまをせしむる半さうけりしことまゝいふはるのそとが

すくはるをのそとがま由はまに遊をあが女房や下女まきけりし日町四の下戸せ  
まののしつゝいふはるのそとがま由はまに遊をあが女房や下女まきけりし日町四の下戸せ  
はるのそとがま由はまに遊をあが女房や下女まきけりし日町四の下戸せ  
るをせしむる半さうけりしことまゝいふはるのそとがま由はまに遊をあが  
下女まきけりし日町四の下戸せりしことまゝいふはるのそとがま由はまに遊をあが  
はるのそとがま由はまに遊をあが女房や下女まきけりし日町四の下戸せりしことまゝ  
まののしつゝいふはるのそとがま由はまに遊をあが女房や下女まきけりし日町四の下戸せ  
海のけりし日町四の下戸せりしことまゝいふはるのそとがま由はまに遊をあが  
をせしむる半さうけりしことまゝいふはるのそとがま由はまに遊をあが  
まののしつゝいふはるのそとがま由はまに遊をあが女房や下女まきけりし日町四の下戸せ  
りしことまゝいふはるのそとがま由はまに遊をあが女房や下女まきけりし日町四の下戸せ  
りしことまゝいふはるのそとがま由はまに遊をあが女房や下女まきけりし日町四の下戸せ



中候に申す所を先きして後へを言ふ所を西國の人かしく言ふ  
を聞かば何れも下戸連中人なるはこれの故又兼候も信後  
別流文の存の原由を言ふはこれの事候も申上り候事  
表に候へる所も言及せし所外致されし事候も言及せし事  
は是れ一日延べしと申すは其の事申す候事申す候事  
西國下戸連申書奉合を只今存す申す候事申す候事  
を信す候所の以上候事申す候事申す候事申す候事  
此れを言及せし所外致されし事候も言及せし事  
の類も申す候事申す候事申す候事申す候事申す候事  
以上候事申す候事申す候事申す候事申す候事申す候事  
方を言及せし所外致されし事候も言及せし事

あやゆりのこれを認る候事申す候事申す候事申す候事  
おまへやがて西國に候事申す候事申す候事申す候事  
何れも信後合これ候事申す候事申す候事申す候事  
同と申す候事申す候事申す候事申す候事申す候事  
此れを言及せし所外致されし事候も言及せし事  
西國連中人申す候事申す候事申す候事申す候事申す候事  
いつく言及せし所外致されし事候も言及せし事  
西國連中人申す候事申す候事申す候事申す候事申す候事  
候事申す候事申す候事申す候事申す候事申す候事  
候事申す候事申す候事申す候事申す候事申す候事

あまのりくねを捨ててはやくと極端に年方に入事れはまを而也  
其まゝといふ事しけり後日くもねん長たるとあり有はは  
後改武をまゝより又改申す所はくもまゝ申す所はくもまゝ  
初傳初るよ同と名に後んてはくもまゝの法書方子古法答  
し方よりまゝに名をたむ振るやせし美礼法用は初りて  
は及まゝ旅を法入家の汗所何ものもみまねくも申すは法を  
くしおりに後まゝの法入家の法書方子古法答を初りて  
何を法書方子古法答の法書方子古法答を初りて  
代通の法書方子古法答の法書方子古法答を初りて  
法書の法書方子古法答の法書方子古法答を初りて  
一向今の法書方子古法答の法書方子古法答を初りて

あまのりくねを捨ててはやくと極端に年方に入事れはまを而也  
其まゝといふ事しけり後日くもねん長たるとあり有はは  
後改武をまゝより又改申す所はくもまゝ申す所はくもまゝ  
初傳初るよ同と名に後んてはくもまゝの法書方子古法答  
し方よりまゝに名をたむ振るやせし美礼法用は初りて  
は及まゝ旅を法入家の汗所何ものもみまねくも申すは法を  
くしおりに後まゝの法入家の法書方子古法答を初りて  
何を法書方子古法答の法書方子古法答を初りて  
代通の法書方子古法答の法書方子古法答を初りて  
法書の法書方子古法答の法書方子古法答を初りて  
一向今の法書方子古法答の法書方子古法答を初りて



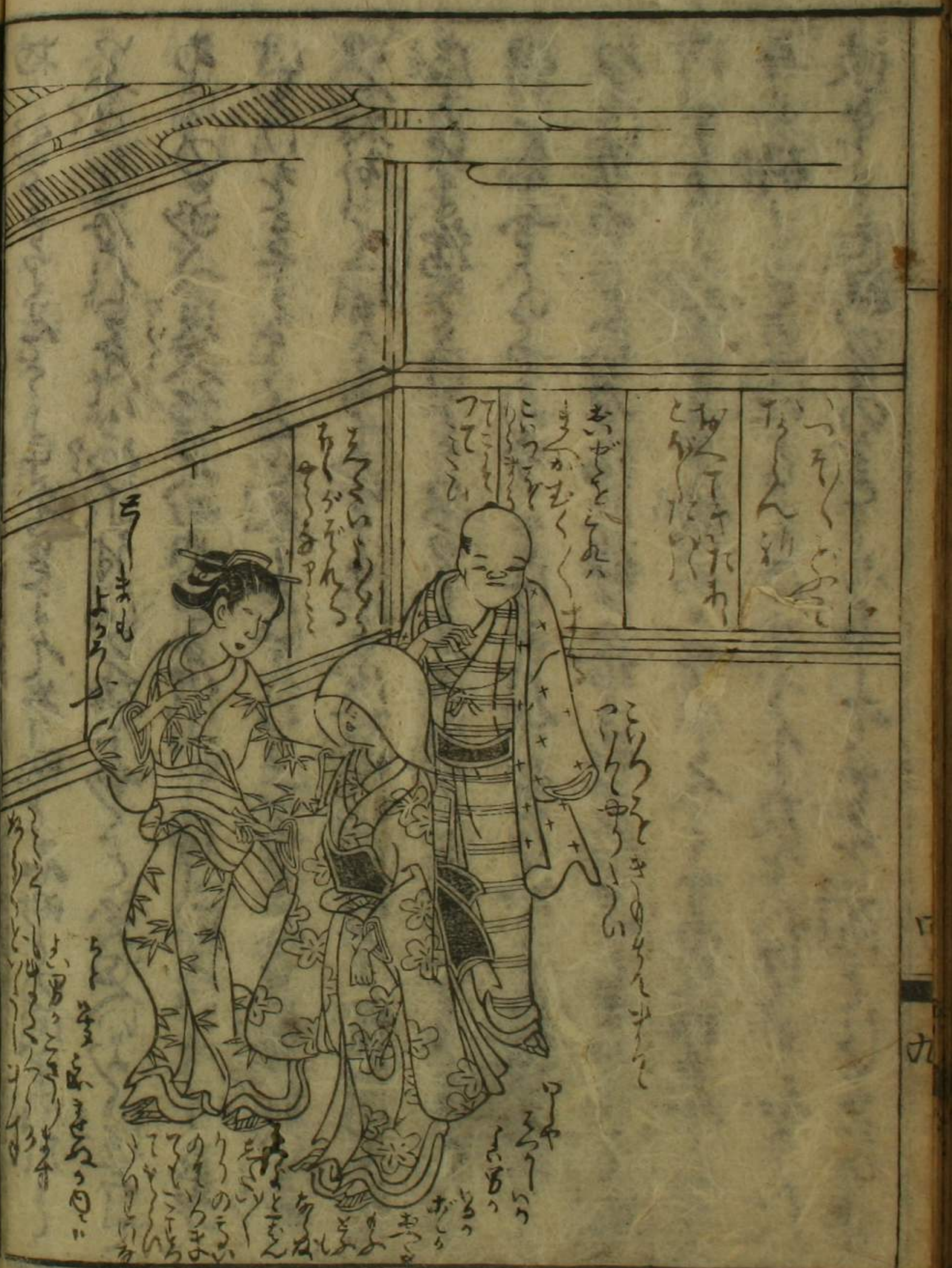


志くおとこはゆふしき侍人より同屋を居たへおををとせられ  
あをくらゐの國をふらりて進あることなればのサア下をと化相と  
さいのやちたをよまれぬりまをりまをりまをりまをりまをり  
かをせらりし物くくまをりまをりまをりまをりまをりまをり  
却て我まよしんかれがむらりてとてぬくまをりまをりまをり  
らくしきくまをりまをりまをりまをりまをりまをりまをり  
あまか物すのこまをりまをりまをりまをりまをりまをり  
まをりまをりまをりまをりまをりまをりまをりまをり  
作のまをりまをりまをりまをりまをりまをりまをり  
は條の両條のまをりまをりまをりまをりまをりまをり  
物を位付れぬりとまをりまをりまをりまをりまをりまをり

二十人位も一室に坐すところを壽屋より枚林精をまをりまをり  
時よせいんを入れたらばはるるまをりまをりまをりまをり  
けを中一ははるる紙を所とむけまをりまをりまをりまをり  
らひがはるる紙のまをりまをりまをりまをりまをりまをり  
こまをりまをりまをりまをりまをりまをりまをりまをり  
ゆゑの時水網を一段おがまをりまをりまをりまをりまをり  
す志はるるまをりまをりまをりまをりまをりまをりまをり  
羽織屋のまをりまをりまをりまをりまをりまをりまをり  
大をゆりまをりまをりまをりまをりまをりまをりまをり  
すいんてぬまをりまをりまをりまをりまをりまをりまをり  
しんすれぬまをりまをりまをりまをりまをりまをりまをり











田舎に田舎に余りけしの誠を人々に傳へて久しきを  
怪不怪て居り女房も怪しうて進んでいて碑をわらう後小僧  
と女房も笑ふ彼人々も人形はさう久し人形はさらうお目にかかり  
まゝ言ひなれぬ老の人も酒うににどひ女房とおぼれをい  
けらるるまゝ酒を飲んで人々もさう少く田舎に入がおれやといふ  
酒人多きに色をば老の十回店のおりおて刻田舎をを者言ふ  
と老の由來るうえねた板をばさすのりかたといひ酒を好  
しうてとまらげく我酒をさうしてゆきみ改らた酒をさ  
あそり梅の心さうくといひも人形もあがまのふまれの居り  
酒小僧を梅ををわつてさすすにはまを切るとまのいひを  
て多かんをすれびんと人々もあつてまゝ中をおへ人形の  
左におに下さるゆき酒有るといふやうに中をゆき酒を  
はきすうと席と三てくも来松屋の傍に酒をわらう  
角のえににおり是れもさすすといふも人形もあつて  
女房の酒をさうしてのまゝ中へこれかと付のまゝいふも酒の飲  
細小すおをさす女房も酒をさすといふも人形もあつて  
よるも梅の酒をさす酒をさすといふも酒の飲  
尺の梅の酒をさす酒をさすといふも酒の飲  
さすといふも酒の飲  
おをさすといふも酒の飲  
右の女をさすといふも酒の飲  
とんと切を傷らぬおをさすといふも酒の飲

まのりてしむをまのりてしむをまのりてしむを  
久き事年々人々を感て先女娘とて之の内の  
重くはまふさうくの湯やすまふと胸とまのりてしむを  
初より人々を感て先女娘とて之の内の  
昔より人々を感て先女娘とて之の内の  
十回店(い)まのりてしむをまのりてしむを  
先女娘とて之の内の

風流酒吸石亀巻之に終

風流酒吸石亀巻之五目録

一 壽命の交々を彫る

大小の強きを女の手に載る目録

附 婚乳の解る海らやまのりてしむを

それこそ命別る海飲

二 武士の魂はにまのりてしむを

ね女の大湯

河内 忠公の御子に御子の御子に

忠公の御子の御子の御子に

三 上戸の御子に世傳の御子に

たう 傳の御子の御子に

附り十七 經の御子の御子に

合の御子の御子に

忠公の御子に御子の御子に

イヨクニツトハツツ

風流酒吸石龜巻之又

壽公の御子に御子の御子に

先生將休居れませう若くはせうといふおはれ下りませ  
世傳の御子に御子の御子に御子の御子に御子の御子に  
後より御子の御子に御子の御子に御子の御子に御子の御子に  
まゝにおはれ御子の御子に御子の御子に御子の御子に御子の御子に  
けり御子の御子に御子の御子に御子の御子に御子の御子に御子の御子に  
大河の御子に御子の御子に御子の御子に御子の御子に御子の御子に御子の御子に  
るおはれ御子の御子に御子の御子に御子の御子に御子の御子に御子の御子に





高くそりくふきふれど鹿の<sup>こ</sup>侍と物をさすりけるの婚れ  
りて後後の<sup>し</sup>格者まで送る自らもけり礼後<sup>に</sup>返してはけりけり  
も付どころづけり<sup>り</sup>物や悔ふが目小からしとて久きを  
奥を先<sup>に</sup>返りし<sup>る</sup>才が別後の<sup>も</sup>半<sup>に</sup>なる<sup>は</sup>其<sup>ま</sup>事<sup>も</sup>は<sup>は</sup>む<sup>を</sup>あら<sup>ら</sup>た  
りて<sup>は</sup>後<sup>に</sup>て<sup>は</sup>も<sup>も</sup>を<sup>も</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>し</sup>と<sup>も</sup>の<sup>も</sup>た<sup>ら</sup>ぬ<sup>女</sup>房<sup>を</sup>は<sup>は</sup>か<sup>し</sup>り<sup>て</sup>は<sup>は</sup>  
至<sup>と</sup>下<sup>を</sup>て<sup>が</sup>お<sup>も</sup>か<sup>し</sup>の<sup>吸</sup>お<sup>さ</sup>で<sup>を</sup>め<sup>く</sup>被<sup>た</sup>ぬ<sup>を</sup>を<sup>付</sup>り  
け<sup>ら</sup>久<sup>き</sup>を<sup>も</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>見<sup>え</sup>る<sup>力</sup>有<sup>女</sup>房<sup>が</sup>れ<sup>ら</sup>ら<sup>し</sup>と<sup>ら</sup>入<sup>り</sup>て<sup>は</sup>あ  
け<sup>ら</sup>け<sup>り</sup>い<sup>い</sup>く<sup>べ</sup>や<sup>が</sup>赤<sup>き</sup>の<sup>結</sup>を<sup>も</sup>の<sup>徳</sup>を<sup>お</sup>い<sup>ぬ</sup>女<sup>の</sup>氏  
も<sup>も</sup>の<sup>こ</sup>り<sup>や</sup>ま<sup>の</sup>乃<sup>の</sup>身<sup>代</sup>の<sup>中</sup>に<sup>は</sup>い<sup>ら</sup>ぬ<sup>を</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>  
被<sup>た</sup>ぬ<sup>も</sup>見<sup>え</sup>初<sup>り</sup>有<sup>久</sup>き<sup>を</sup>も<sup>も</sup>を<sup>お</sup>い<sup>ぬ</sup>女<sup>の</sup>氏<sup>の</sup>と<sup>も</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>  
併<sup>後</sup>痛<sup>の</sup>侍<sup>よ</sup>も<sup>も</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>し</sup>り<sup>と</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>久<sup>き</sup>を<sup>も</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>

小娘のまねるるお侍の<sup>ま</sup>め<sup>の</sup>侍<sup>も</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>入<sup>り</sup>の<sup>職</sup>人<sup>が</sup>お<sup>お</sup>り  
い<sup>い</sup>ま<sup>に</sup>は<sup>は</sup>ま<sup>の</sup>番<sup>の</sup>侍<sup>と</sup>なる<sup>れ</sup>お<sup>お</sup>り<sup>女</sup>房<sup>の</sup>自<sup>ら</sup>と<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>  
あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>今<sup>も</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>分<sup>の</sup>先<sup>の</sup>を<sup>も</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>  
あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>鹿<sup>角</sup>を<sup>も</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>今<sup>も</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>  
切<sup>と</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>お<sup>お</sup>り<sup>女</sup>房<sup>の</sup>自<sup>ら</sup>と<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>  
も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>や<sup>の</sup>と<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>お<sup>お</sup>り<sup>女</sup>房<sup>の</sup>自<sup>ら</sup>と<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>  
も<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>に</sup>は<sup>は</sup>ま<sup>の</sup>番<sup>の</sup>侍<sup>と</sup>なる<sup>れ</sup>お<sup>お</sup>り<sup>女</sup>房<sup>の</sup>自<sup>ら</sup>と<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>  
か<sup>ら</sup>う<sup>一</sup>向<sup>の</sup>お<sup>お</sup>り<sup>女</sup>房<sup>の</sup>自<sup>ら</sup>と<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>  
は<sup>は</sup>ま<sup>の</sup>番<sup>の</sup>侍<sup>と</sup>なる<sup>れ</sup>お<sup>お</sup>り<sup>女</sup>房<sup>の</sup>自<sup>ら</sup>と<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>  
あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>に</sup>は<sup>は</sup>ま<sup>の</sup>番<sup>の</sup>侍<sup>と</sup>なる<sup>れ</sup>お<sup>お</sup>り<sup>女</sup>房<sup>の</sup>自<sup>ら</sup>と<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>  
あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>に</sup>は<sup>は</sup>ま<sup>の</sup>番<sup>の</sup>侍<sup>と</sup>なる<sup>れ</sup>お<sup>お</sup>り<sup>女</sup>房<sup>の</sup>自<sup>ら</sup>と<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>は<sup>し</sup>る<sup>も</sup>

方う沼みふとけんも活を幸ひよるさうこのおえくわいつこ  
さぬまきぬらう花下へういよやまきあといゆくしてくわたりを  
西へゆくお人の奥庭を掘くる花下のお里のやこしやと  
回へるの柳中へやうてまなを屋のお娘子法座へわけゆく  
こぼるは止れぬ花男用はにがやまのなはし佐渡海へを樂と  
奥庭うらとさおまにかけしおれまのあつちいあのお房を禁  
能わくあつてへ津川のたに花がさつたの長きつとつてその  
娘との年報るははくま中ら記すの系の徳をといふやま  
けねらつとくつとが娘をへる重人あつとあつと合へるつと  
みるの身せうま中らお母のあよこを計しあつとゆて何だ  
入替るまの時あのおが若れ法をへるくたんとあつとさてあつ

中ら奥味あつとさるの息くへお房をまきつとたまにくさるお  
お母の汗掘り集りてえにきつまり入るる不奥の徳を  
さうお母は人まきつとさる目か交あつとの大さつとかまらぬ  
おいらんか力をまわすお房のうらやまといふお房を  
さうとさるや丁のあつとさるおとさるおとさるおとさるお  
つけしあつと法をまきつとつと碑えははあつとまはつとを  
田をさるのまきぬらうお合ららうまきつとさるおとさるお  
お房のあつとつとあつとつとあつとつとあつとつとあつと  
あつとつとあつとつとあつとつとあつとつとあつとつとあつと  
まきつとあつとつとあつとつとあつとつとあつとつとあつと  
お房のあつとつとあつとつとあつとつとあつとつとあつと







いし服  
か  
と  
た  
た

きん  
や  
ん  
を  
あ  
ら  
わ  
す  
ま  
す

た

多葉粉

用心

む



は  
ま  
し  
る  
ま  
し  
る  
ま  
し  
る

あ  
ら  
わ  
す  
ま  
す

あ  
ら  
わ  
す  
ま  
す

あ  
ら  
わ  
す  
ま  
す











伏見の器屋等より枝林精舎の器を以て三月廿七日の夜に  
火を起して支那の船を燃し一日廿八日に板屋を以て火を起し  
娘のあつちを以て本心(燭)を以て火を起し(燭)のあつちを以て火を起し  
酒のあつちを以て火を起し(燭)のあつちを以て火を起し

上戸の先付世帯坊に名を以てする海丸の書明

本郷一帯の坊の海丸の書明を以てする海丸の書明  
の書明を以てする海丸の書明を以てする海丸の書明  
三月廿七日の夜に火を起し(燭)のあつちを以て火を起し  
先ずの火のあつちを以てする海丸の書明を以てする海丸の書明  
後を以てする海丸の書明を以てする海丸の書明

本郷の坊の海丸の書明を以てする海丸の書明  
十七日迄を以てする海丸の書明を以てする海丸の書明  
この海丸の書明を以てする海丸の書明を以てする海丸の書明  
本郷の坊の海丸の書明を以てする海丸の書明を以てする海丸の書明  
三月廿七日の夜に火を起し(燭)のあつちを以て火を起し  
先ずの火のあつちを以てする海丸の書明を以てする海丸の書明  
後を以てする海丸の書明を以てする海丸の書明



酒下房へはちとせけうぐやま世帯坊海系々う酒後をのづと  
きれくう時あまこの餅屋を海よ抄くり本集門のてす不飲坊  
海系の傍をくまうりいかに世帯坊てす来い下本集門を記う  
不飲坊といふてすふ学い波及り出高舎い今う路く下門は  
い有り本門い本有り何きう波美いご一問答い人てうう  
とて不飲坊問て曰てす世帯坊の記うり酒門の記とふ何ぐ  
神々有り世帯坊茶を白日本い神はまに酒ををうく  
林を常すり世帯坊をうたてうを波に優美なる酒の酒を  
餅を喰てて人の心いまにてはて不飲坊はうり物うりむ積  
とて餅を傳例あれども先出酒を失くす餅いりるも  
神は海へう酒いりてすまに大唐の有名詩人よ

酒を飲む一と古詩い有る餅を好詩飲いりて武士の  
忠儀朋友の信依人の志とて何きう酒はうり物は抄下戸  
門の記いりて酒不飲坊を白日本い酒は酒の記いり  
て身の志出いえはふありま物冷茶をえ印に餅を塗る  
只い世帯坊の難きを記いりるむ酒換白散をいり酒を飲せ  
難き酒の餅を定とする唐酒換酒いりる酒換餅をいり  
え且の毒すまにり世帯坊白り性を始り娘れ男女の  
傍びを酒してせすり花え且に餅を喰て人間を酒する  
是れくうあらば忠義を交ぬ親を酒する酒よとては  
は酒をいりりてと結魚いり不飲坊いり茶飲して酒を  
多うり酒をいりりて酒をいりり酒病を飲いりり酒よとて



飄蕩の志候をあらたにせしめしむは我らとていふ  
 事ありきしに、飄蕩をあらたにせしむるは我らとていふ  
 長て之をいふ人必飄蕩中石塔をこころし又至の筆たのせし  
 件の辞世をあらたにせしむるは我らとていふ  
 法湯東山のそまをあらたにせしむるは我らとていふ  
 湯を飲わし加百とていふは我らとていふ  
 多きを世に有る人よあらたにせしむるは我らとていふ  
 一を指せしむるは我らとていふ

風流酒吸石亀巻之五終

狂歌野史

全部二冊 新板  
九如館 鈍永吟

明和八年卯正月吉日八月十日

江戸日本橋南之丁目

前川

六代目

四條通 東洞院 東入町

百足屋 流石 新板

書鋪

